

成蹊會誌

第十三号



—1957—

成蹊会誌 第十三号 目次

成蹊会役員及び委員一覧 1

総会御報告 6

枯林忌 21

藤村孝太郎先生の憶い出	福井純一	22
牧野富太郎先生の憶い出	立ふみ子	23
河井・池田両君を憶う	赤星国夫	25
西池季顓君の憶い出	亀井壽雄	28
和泉武夫君を憶う	植竹乙吉	23
米田君の憶い出	高橋 淡	28
工学博士・小野薫君を追悼して	栗原美能留	29
物故会員		32

続・蹊園夜話 相磯六郎 33

「スーパーマーケット」という生活に便利な店の話 瀬木博親 35

セントポールズ・スクール海外留学生派遣について 40

セントポールズ校の思い出 榎原 稔 42

成蹊会近況 44

学園近況 47

支部便り 49

東海支部・関西支部・九州支部・
やよい会・テキスタイル・クラブ

会員消息 35

育英奨学事業 43

中村小波先生古稀記念事業 46

会員諸兄へ 48

クリスマスパーティー 52

昭和三十一年度版会員名簿訂正・追加表

会費申込芳名録 78

セントポールズ・スクール 海外留学生派遣について

戦後 マツカーサー杯英語弁論大会に出場して連続2回優勝杯を獲得した榎原稔君は成蹊高校(旧制)在学中渡米して、米国での有名校であるセントポールズ・スクール(中学3年、高校3年)に入学し、同校卒業後直ちにハーヴァード大学に進学し、昨年学業を終え帰国して、現在三菱商事会社に入社している。榎原君以後、有馬、清水の両君が成蹊高校より同じコースをたどり、現在ハーヴァード大学で勉強研鑽中であり、更に平井君がその後につづいて在学中であると聞いている。

榎原君が帰国に際してセントポールズ校長ウオレン先生より托されたことは「自分は日本に於いて成蹊学園という学校は知らない。併し、貴君及び貴君の後輩を育てくれた成蹊学園は立派な学校と思う。何故なれば、成蹊出身の貴君等は、本校に於いても実に優秀な生徒だからである。今後、成蹊高校在学より隔年に1名程度本校に留学生として迎え入れたいと思う。学費生活費一切(約年額72万円)本校で負担するから帰国後成蹊学園と打合せてくれまいか」と云う言葉であつた。

本会は榎原君の伝言を聞いて、成蹊高等学校当局に伝え、賛意を得たので、本会理事会に諮つたところ、その意義を認め、旅費並びに支度金を本会育英奨学金規程に則つて支給することを議決した。

セントポールズ・スクールについては別掲榎原君の英文紹介を御覧になれば、尽されている通り、米国に於ける最優秀校の一つであり、同校に入学することが米国人の誇りとされており、英国のイートン、ハロー校に比肩する学園である。現在成蹊高校に於いて留学生を人選中であり、近く人物、学業共に優秀な生徒が選ばれて、九月の新学年に間に合うよう派遣されることとなろう。(常務理事・谷岡喜久蔵)

Introducing St. Paul's School

Among the countless high schools of the United States there are a few so called prep-schools, modelled after the British public schools, which stand apart from the rest. Some of the prep schools tend to be merely expensive institutions to produce the displaced snobs, but some combine the best of British tradition with the best of American democracy. Distinguished among the latter is St. Paul's School, Concord, N. H.

Able led by the Rev. Matthew Warren, the present St. Paul's has a student body of about four hundred and fifty, housed in seven dormitories which are spread through the vast grounds of the school. The day of a boy is regulated by the chimes of the school chapel and starts at 6:30. By 8 o'clock the boys will have cleaned their rooms, finished breakfast and assembled in the chapel.

The mornings are taken up with classes and boys run from classrooms to

物がきめられず店員のすゝめたものを買っているという。自分の好みで選び出すということが出来ない人が多いそう。しかし一方には、東洋紡のダイヤシャツをくれと店へ入るなり注文する客があるという。この人にはダイヤシャツが切れている場合他の品をすゝめても無駄で、入荷する日に又来てもらうより仕方がないそう。この商品は常に広告により販売が強力に援護射撃されているから、客が店へ入る前から好みを決めて来られる良い例である。又包装ということも大きな問題で容器或は箱が甚だ魅力的につくられ、それ自身がよく内容を説明し、客を説得する力があれば、これは店員の助けなしに相当売れるものである。

いかに日本の人件費が安いからと言っても、それがある、ないでは相当の差が出来る。経費節約になつて商品が薄利多売すれば、いかにサービスされ好きの人でも質は同じで安い品の方へ引かれるのは当然であらう。又小売店では店員、売子の「感じがよい」ことが生命である。或調査によると、客は少々高くても、「感じがよい店」へ六〇—八〇%行くと答えている。

そこに店員が居なくなれば、それを「感じよく」させる必要もなくなるのである。

客は品質のよい品物の豊富なしさも値段の安い、清潔で買いいい品に集るのである。

これ等スーパーマーケットが、当初は小さな小売店から発展して、「客は便利な方を選ぶ」という法則により次第に大きくなり、大資本による経営が増加し、今日では益々その力を伸し、同業者が激しい競争をしているが、同時に零細な食品小売業者は次第にその力を失っているのは致しかたない。(マーケティングの教授が小商店の特徴とい

うものを各々挙げて解説した時、その一つに「経営が悪い」ということを言つた。経営が良ければ大商店になつていくというわけだ。大変アメリカ的な考えで面白いと思つたことがある。それは大資本の側の責任でも、客の責任でもなく、小売業者自身の意図すると、せざるににかゝらず、彼等のサービスの質が、又運営が客の「便利」にかなわなかつた結果なのである。しかし他方では、大資本の力による原料買付、仕入部門の圧力が農民に及び、年々彼等がスーパーマーケットで買うハムの値段は騰るのに、彼等の売る豚の価格は下げられる一方だという社会問題も起つてゐる。

しかしながら現在、スーパーマーケットはアメリカ人の生活の上に缺くべからざるものの一つとなつたことは疑いない事実である。

日本でもデパートあたりがこれに近い組織方法を地下室食品部に作りつゝある。案外もう誰かが実行しているかもしれない。将来、沢山の人が時間を大切に、お金を本当に大切に合理的な生活をしたと思う様になつたら、かならず成功する仕事の様に思える。食料品屋をやつても、人々の生活を便利にし、それを企業化して行くチャンスもなきにしもあらずと考える。

原子力の時代がやつて来て、人間の食生活が丸薬に変わることは無いであらうが、技術家、生産者達によつて食品の種類が変化し、食生活が合理化されて行くことは当然考えられる。そうすればその配分、販売方法が同時に変化して来るのは当然で、スーパーマーケットの様なものが生れ出る要素も出て来るに違いない。「食料品屋など」と馬鹿にしないで、案外優秀な成蹊人がこれを始めて、我々に大きな便利を与えてくれる日が来るのも遠いことではないかと、私は望みをいだいている。

labs and libraries. Once the basic academic requirements are fulfilled, each student is given opportunities to attend advanced courses and develop their talents.

After lunch the boys change their clothes and go out for sports. Football in the autumn, ice hockey in the winter, baseball, track and rowing in the spring are the popular events. Here again, the vast resources of the school, give each boy an opportunity to compete. To illustrate, in the autumn eight football matches are carried on simultaneously, each boy placed in a suitable team.

During the evenings, the boys return to their rooms to study, attend discussion groups, have coffee sessions in the masters' rooms or just relax listening to records.

The annual income of the school is about \$1.5 million and the per annum payment of each boy is about \$2,000. This price is expensive even for the U. S., but with a scholarship scheme and a capably managed admission office, the school has become famous for the quality of their graduates. Each year the majority of the graduates enter Harvard, Yale or Princeton and rank high in their respective classes. Each year, more people with St. Paul's School background, become prominent in their respective callings.

Perhaps, however, the future of the School can be best sought in the thoughts of the head master of the school. In conclusion, a quote is taken from the report which Mr. Warren gave at the Hundredth Anniversary of the school a year ago.

"I have said to certain boys in this school during the last year or so that we at St. Paul's School are concerned to train men who have the capacity to become Secretary of State and that we dare not settle for training boys to become secretaries of local country clubs.Our task relates to a nation's necessities and a culture's hunger, a society's life blood. We betray ourselves if we do not keep this entirely clear as we look to the future.The discipline he undergoes in order to live here at all is the same discipline, we count on, when he is thirty years older, to carry him through the outrageous events of life and to enable him 'to stand, and having done all to stand.'"

(榎原 稔記)

セントポールズ校の思い出

榎 原 稔

涼風に秋を感じる頃になると私は又ニューヨークを思い出す。見渡す限り軽く起伏する山々は一面の紅葉にもえ、所々に此の地方独特の白く塗られた木造の家が浮上つて見られる。赤トンボこそは見られないが其の代りに乾いた蒿の香がみなぎり、色とりどりのシャツを着た子供達が薄の穂を飛ばしながら駆廻る。果物の外には別にこれと言つて収穫もない此の附近では、二百十日を恐れる必要もなく心から秋の落着きが味える。

日本と違い新学期は此の秋に始まる。私がアメリカに着きボストンから更に七十哩程北のセントポールズ校に始めて来たのも丁度此の頃で図書館を開く池の水面は赤と黄の葉に隠されて居た。赤煉瓦の建物にはつて居る蔦も紅にそまつて居た。鳴り響くチャベルの鐘の音に淋しさも感じられたがそれも束の間ですぐに私は四百五十人の学校生活に巻込まれてしまった。

着いた其の晩に早速学校新聞を配達させられて学校中歩廻り、其の間にベンというニックネームをつけられそれが今でも残つて居る。私の部屋は池を木の間から見る赤煉瓦の三階だったのが夜になり生徒が帰つて来ると多勢来て色々と智慧を借してくれ、スポーツはフットボールをする事に決まり又学課は米国史を含めた六課目を採ることにした。本当はラテン語をやらなければ卒業出来ぬのであるがこれは特に免除して頂けることとなり代りにドイツ語を続けることにした。

其の秋から次の年の春迄の僅か九ヶ月間を私はセントポールズで過したのであつたが、私にとつてこれは実に貴重な期間であつた。勉強も運動も随分したが其の外に私はここで始めてアメリカ人と本当に知り合いになり彼等の思いやりとユーモアに接した。其のホンの一例として次の様なこともあつた。

私がセントポールズに着いた時は一応一三〇〇ドル程度の奨学金を頂いて居ることになつて居た。所がセントポールズに着いてみてびっくりしたことには此の学校の一年の費用はだいたい二〇〇〇ドルということなのだ。一体どうしたものかと思案もし先生と相談もしてみたが結論として今更ジタバタしてもどうにもならない事が判り、生来の楽天に物を言わせて心配をやめることにした。学内の買物の為にはチェックブックを渡されそれに必要金額を書込めばいい様になつて居たが私は至極呑気にありもしない金なのにチェックを切つては本やノートブック等を買つた。

しかし卒業も迫つて来ると矢張り自分の赤字が気にかゝり校長のキトリッジ先生の所にまで相談しに行つたが只々大丈夫だから心配するなと言われた。

と、かれこれして居る中に卒業の前夜となり、校長宅の薔薇園の中で卒業生と父兄を招いての晩餐会となつた。私も友達のテーブルに同席させてもらい夕方を楽しんだ。そして帰る時になると皆順々に校長の所に握手しに行く。私の番が廻つてキトリッジ先生の所に行くと先生は私に白い封筒を渡され「これは一寸とした君へのプレゼント。私と学校からです。あ、それから君が在校中の費用は全部学校で持つことになつたから心配せぬ様に。」

其の場ではあける暇もなく私は部屋に帰つて始めて封を切り中に三

○ドルのチェックを見付けた。早速次の朝校長の部屋に伺った。お礼も英語では中々思つた通りに言えないのが歯がゆい様だったが、す先生とキトリツジ先生は目をいたすうちに細めて、「君はロビンフッドの話を知つて居るかね」と聞かれた。ロビンフッドと言えは中世の英国の義賊なので「はい、知つて居ます」と答えると「ロビンフッドは金持の財産を巻上げてそれを本当に必要な人達に分けて居たのだが、泥棒であることは確かで悪い奴だね。所で私も同じ様なことをやつて居るのさ。悪人にお礼を言つては困るね」。

ホンの一例に過ぎないが、私は此の様な配慮のお蔭で無事にハーバートに進み、ヨーロッパ迄一周する事が出来た。又私の後に成蹊の後輩が既に三人セントポールズに招かれ、すべての面倒を見てもらい、

私と同様に暖かい思いやりに包まれて進み二人は今ハーバートに入つて居る。

私は此の米國で一流のセントポールズと成蹊をどうか恒久的に結びつけたかと思ひ米國を出る前に色々セントポールズの人達と話した所成蹊から毎年でも優秀な生徒を送つて来ればすべての面倒を見る用意もあると言つた所が当時は驚いた事に成蹊の方が全然興味なく、金がないとか人材を強いて外國に送ることはないとかいう方だつた。幸い最近に至り成蹊の考え方も變つて来た様である。近い中に成蹊セントポールズ奨学金が設立されると思われる。そうしたら今度は成蹊にセントポールズを迎えられる日が程遠くないことと思われ胸が躍る。

三菱商事水産部・旧高修了

育英奨學事業

昨年度より始めた育英奨學制度は本年度も継続事業として行ひ、去る四月二十五日第二回育英奨學選考委員會を開催した。当日は学園側より若林高校々長、関島大学々生部長が出席され、推薦候補者の人物・學業等につき詳しく説明があり、終つて本會選考委員によつて慎重審査の結果次の諸君を決定した。ついでセントポールズ・スクール海外派遣留學生(別記参照)選考に移り、若林校長より推薦事情の説明がなされ、全員一致をもつて大久保基君を第一回留學生として派遣し、同校(米國・ニューハンプシャー州・コンコード市)迄の旅費を支給することを承認した。

一、昭和三十一年度育英奨學生(新規)

岩田喜代治 成蹊大学一年、福井県立鯖江高校卒

月額 二、〇〇〇円

木村知道 成蹊高校三年、成蹊中学校卒

月額 二、〇〇〇円

影山莊一郎 成蹊高校三年、成蹊中学校卒

月額 二、〇〇〇円

三浦隆 成蹊高校三年、成蹊中学校卒

月額 一、〇〇〇円

二、昭和三十一年度育英奨學生(継続)

横田光史 成蹊大学二年、成蹊高校卒

月額 二、〇〇〇円

新居嗣郎 東大教養学科四年、成蹊高校卒

月額 二、〇〇〇円

山口達明 成蹊高校三年、成蹊中学校卒

月額 二、〇〇〇円

鹿毛達雄 東大西洋史科四年、成蹊高校卒

月額 二、〇〇〇円

佐藤敏雄 成蹊大学二年、神奈川県立鎌倉高校卒

月額 二、〇〇〇円

糸川洋夫 成蹊大学四年、練真高校卒

月額 二、〇〇〇円

平野孝彦 成蹊高校卒(32年)、成蹊中学校卒

月額 二、〇〇〇円

三、セントポールズ・スクール海外留學生(第一回)

大久保基 成蹊高校三年、成蹊中学校卒

旅費 未定

成蹊会近況

会誌第十二号掲載以降、昭和三十一年三月末日

昭和三十一年九月

○成蹊会誌第十二号発行(十三日)

十月

○第六回理事会(五日)

会場 同友クラブ(東京・千代田区内幸町)

出席 理事十二名(現在数十五名)

監事 二名(現在数三名)

成蹊学園の諸問題について懇談

○九州支部会(十三日)

支部便り参照

○中国地方成蹊会(十四日)

山口県平生町に在住の佐々木隆氏(高五回・新光学院長)のお世話で、最近しばしば中国地方成蹊会が開かれてるので、本部より谷岡常務理事が九州支部会出席の帰途広島に立寄り、会務報告並びに各地方支部の現況について説明旁々懇談した。

○東海支部会(十七日)

会場 たちそう(名古屋)

出席 十二名

本部より谷岡常務理事出席し、会務報告並びに現況について説明旁々懇談した。

○中村小波先生古稀記念祝賀会(二十六日)

別記参照

十一月

○青木常雄先生古稀記念祝賀会(三十日)

会場 八重洲グランド(東京駅前八重洲ビル)

出席者及び記念品贈呈者

大久保捨蔵、平生太郎、新田義美、堀内信、矢野義男、丹下富士男、多田穰、栗原美能留、高尾泰弘、栗本東一、永田竜之助、今井嘉道、村上藤太、小林太郎、赤星平馬、三好道矢、藤田謙次、早水守夫、桂広太郎、森新太郎、田坂駿、田山正男、海江田信和、中野惇、平塚保明、芝

十二月

○大学新卒業生(三十二年三月卒業)各ゼミ

ナール代表と懇談会(七日)

会場 ニュートキョー(東京・教習屋橋)

大学部会より石坂委員長以下出席し、各ゼミ代表十四名と懇談、本会の概要を説明し新卒業生全員洩れなく終身会員として入会